# 飛び込んでやってみる勇気が必要なんだ。――百鬼丸さん

YAMANASHI People

## 甲斐のひと、インタビュー

**百鬼丸**（ひゃっきまる）

1951年富士吉田市出身。山梨県立吉田高等学校卒業後、東洋大学工学部にて建築を学ぶ。27歳から独学で切り絵を始め、これまでに手掛けた本の装丁は500冊以上にもおよぶ。1997年には第6回文藝家クラブ大賞美術部門受賞。「百鬼丸」という名前は、手塚治虫のマンガ「どろろ」の登場人物から。出版社のパーティーで手塚氏に会った際に直接了承をもらったという。現在は、日本を代表する切り絵作家として雑誌の挿し絵、書籍のカバーやカレンダーなどで活躍中。7月には、道の駅「富士吉田」アリーナホールにて「風林火山を切る展」を開催。

山梨県立吉田高校の食堂には、切り絵作家、百鬼丸さんの作品が掲げられている。

「地球をひっぱる若者たち」。切り絵の原画を元に壁一面を飾る壮大なこの陶壁画は、さまざまな人生経験を積んできた作者から後輩たちへのメッセージだ。

高校卒業後、大学で建築を学んだ百鬼丸さんは設計事務所へ就職するが、人に使われるのが肌に合わないとわずか半年で退職してしまう。その後、ものを作る職人になるか社長になるか考えた末、夢のありそうなファッションモデルのマネージャー業を始める。しかし「やはりものを作りたい」と、二十七歳のときに愛知県常滑市で焼き物の世界に転身を試みた。陶芸家を目指すには遅い出発であった。

そこでオリジナリティを出すために、自分の何か得意なものを応用して、付加価値のある焼き物を作れないか考えた。そして思い当たったのが、小学校のとき得意だった版画だった。

粘土を紙状に薄くし、考えた図案どおりにナイフで切り、それを皿などに貼るというアイデア。あらかじめ図案を切っておこうと、その紙を切る作業にこれまでにない手ごたえを感じ、「こんな集中した状態で、人生を終われれば」と思ったそうである。それから数日後、切り絵のプロになる決心をした。切り絵作家、百鬼丸の誕生である。

アルバイトをしながら切り絵の製作に励み、マネージャー時代に出入りしていた出版社に作品を売り込むという活動を始めた。意外にもすぐに仕事が舞い込み、三年後には週刊誌の表紙連載をするなど、名実共にプロとなった。

情熱的でフットワークも軽い百鬼丸さん。「いい仕事をしたい。だから作品の製作には、すごく時間をかけるんです」と仕事のスタンスはいつも前向きだ。

そんな百鬼丸さんの作品をもっと世間にアピールしようと、幼なじみや中学・高校時代のテニス部の先輩たちが中心となって、「チーム百鬼丸」というプロジェクトを立ち上げた。その第一弾は、来年の大河ドラマ「風林火山」に向けて制作された武田信玄のTシャツ。切り絵が時代物に合うため、なかなか趣があり、信玄が後ろ姿で立つ姿もユーモラスだ。

HYAKKIMARU

現在、百鬼丸さんは関東近辺に三つの切り絵教室を開いている。中でも富士吉田市内で開く教室は、月に一度、高齢の両親に顔を見せる貴重な機会でもある。

切り絵作家として初めての作品が雑誌に掲載された時、それまで反対だった父親から「よくやった」と電話があった。「わずか五千円の仕事だったんですけどね。それ以降、もう仕事のことは応援するばかりで、反対なんてしなくなりました」。

目を細めて嬉しそうに語る百鬼丸さんは、「山梨への郷愁はめちゃくちゃある」という。「チーム百鬼丸」の活動も今後はさらにアグレッシブに、特に山梨での活躍は大いに期待できそうだ。

最後に現代の若者たちへのメッセージをいただいた。

「僕も今でいうフリーターやニートに近い、足もとがしっかりしない生活をしていたことがある。だけど、ぼんやりとでもやりたいことが見つかったら、とにかく飛び込んでやってみる勇気が必要なんだ。最初から駄目なんて思わないで。僕は立体切り絵とか即興切り絵など、人がやってない分野を創始したけど、まだやりたいことがありますよ。人前で立体切り絵作品を仕上げるとか。『スーパー切り絵』と呼びたくなるような切り絵ライブですね」。

まだまだ野心溢れるその話し方と気さくな笑顔に、こちらもパワーをもらった。